

市民意見広告運動 討論集会の報告

去る2月16日(土)、60名を超える参加者で満員となった東京・水道橋の「スペースたんぽぽ」で、市民意見広告運動討論集会が開かれました。緊張感と活気にあふれた集会の一部を、「報告」いたします。

本年5月3日の新聞に掲載する第12期市民意見広告運動はいよいよ大詰めを迎え、4月12日の賛同申込みの締め切りも間近に迫りました。何としても、現在の逆風をはね返す大きな世論のうねりを作り出さなければなりません。いま一度、市民意見広告運動の一層の拡大にご協力をよろしくお願い致します。

鎌田慧さんのお話

昨年12月の総選挙で政権の座についた安倍首相は、一貫して憲法が悪い悪いと言いつけています。保守政治のボスの二世三世として裕福な家庭に育ち、あまり闘争心も必要ないように思えるあの人たちが、なぜ他国や他国人に対してあれほど敵が心を募らせるのか、本当に不思議です。また、誰しも原発事故から隔絶した安全地帯にいられるわけではないのに、あたかもまったく違った世界に住んでいるかのように、彼らが原発の危険性を感じていないのも理解できません。

しかし、ともかく政府の動きに抵抗し、政策を変えさせていく運動を市民がどう作っていくのが、今日の私たちのテーマです。

当面は、原子力規制委員会が検討している原発再稼

働が重大なポイントです。散々批判を受けてきた規制委員会も、さすがに活断層の真上にある原発は停止させると思います。しかし、それは他の原発を生かすための停止、ちょうど犠牲バントでランナーを進めようとするようなものです。言うなら、敦賀、東通、志賀など、本当にだめなところは止めて、ほかは安全ですよ、という新たな安全神話作りをどう迎え撃つか。さらには、われわれのビジョンと具体的な提案を対置し、相手の動きに先んじてこちらから攻撃を仕掛ける運動にしないと、再稼働を防ぎ切れなと思います。

市民運動をどうつくるか

私は「さよなら原発1000万人署名運動」という市民運動を、大江健三郎さん、内橋克人さん、落合恵子さん、澤地久枝さん、鶴見俊輔さん、辻井喬さん、瀬戸内寂聴さん、坂本龍一さんと9人で始めました。福島原発事故があつて、ヨーロッパで何十万人もの集会が開かれているのに、大きな運動が日本にないというのは本末転倒で本当に恥ずかしい。とにかく大きな運動をつくろうというの

がその動機です。

以前の日本の社会運動は、社会党・共産党・総評ブロックという枠組みが中心でした。県評・地区労という総評中心の組織が日本中にあつて、その力が強いところでは大衆運動が成立しました。しかし、60年安保闘争の盛り上がりにより危機感を覚えた資本側の攻勢が強まる中、労働運動の中心にあつた総評や中立労連が解体され、労働再編成という名で連合が生まれた結果、労働運動は大きく後退した。

当時、ベトナム戦争反対をシングルイシューとして活動した「ベ平連」は、市民運動の歴史の中でも特筆すべき存在ですが、全体としては、労働運動に代わる存在までには当時の市民運動は育っていませんでした。

原発反対闘争は県評・地区労を中心に各地域で昔からありました。公開ヒアリングに原発賛成派だけを集めたシャンシャン大会もありましたが、他方では労働組合が動員をかけた機動隊と対峙して逮捕者が出たりすることもあつたのです。歴史的事実として、反原発運動が勝ったところでは原発は建たなかった。しかし、ほとんどの地域では、20年、30年の反対闘争の中で、矢張り刀も折れて、結局54基もの原発が作られてしまったのです。

私は、18歳くらいから中小零細企業の組合員として活動し、その後も労働運動専門のライターをずっと続けてきました。三里塚闘争





の時は、農民と連帯する三里塚廃港要求宣言の会という市民団体をつくりました。古い運動のパターンですけど、文化人や知識人に入ってもらって、悪く言うとか有名人の名前を集めて運動を広げられました。三里塚闘争のあとも、国鉄の分割民営化とか、狭山事件とか、同じパターンでやってきました。でもいま、杉並とか新宿とか首相官邸前とか、若い人たちの運動が自然発生的に始まっています。

気持ちを合わせよう

もはや社共総評ブロックができれば運動が広がるという時代ではないので、とにかくできるだけ多くのグループが全部まとまって、何とか一緒に気持ちを合わせることが大切だと思っています。かつて安保闘争のとき、ぼくらはクラス決議をして国会の近くまでまとまって都電に乗っていくと、人がどんどん集まって来ていた。運動をすれば人が集まってくるという実感を感じて一生懸命にやれば人が集まってくるという喜びを感じてほしいと思います。そんな解放感のあふれる運動を残したいのです。

ぼくは会議のたびに言っているのですが、他の運動の悪口は絶対に言わない、とにかく一緒にやるということを徹底しようとしています。そのためには、いろいろな人に会って、頭でも何でも下げて、とにかく一緒にやる。絶対、分裂はしたくない。一度別れてしまえばもうそれきり、二度といっしょになるのは難しいですから。原発に関わる運動体がいろいろありますけど、とにかく市民運動は一緒に、みんなで行うというふうにやっています。今日みなさんの活発なご意見やご批判を伺って帰りたいと思います。

パネル討論会

鈴木一誌さん — 衆議院選挙と人びと

過去の意見広告は殆ど賛同者のお名前を埋め込むデザインでしたが、昨年は様々な個性的な「命」という字をデザインしました。賛同者名を表記しなければ紙面のデザインは自由度を増しますが、自分の名前がないとさびしいという声もあります。賛同者の声に應えるのか、一般の読者に訴えるのか、意見広告は誰に発信するのか、という問題が出てきます。もちろん意見広告は、不特定多数の人に送るわけですが、不特定多数という人びとはどういう人びととか、それを見極める必要があります。

はやめよう、でもやはり景気も大事だよ」という人びと。この3番目の人びとに注目し、人間とは複雑で多面的なものだという認識から運動を始めなくてはいいかなと思います。



鈴木一誌さん（ブック・デザイナー）

先の衆議院議員選挙の結果、自民党政権が復活しました。1年前はもう完全に原発はやめようという雰囲気だったのが全然違う結果になって、「これが同じ国民か」という感じがします。もともと「原発はやめよう」と思っていた人、「いったんは原発はやめよう」と思ったが、やはり景気の方が大切だ」と考えを変えた人、「原発

吉本隆明さんの言葉に「重層的な非決定へ」があります。衆議院選挙の結果は、多くの人が投票に行かなかった結果でもあるわけです。投票に行かなかった人は、決定しなかった、「非決定」を自分の生き方として選んだと言えます。加藤典洋さんは、今回の衆議院選挙は突き詰めて言うとか国家をとるか国民をとるかかの選択だったと言っています。結果的には、国家

が選択されたわけですが、よく考えると、国家に属さない国民はいない、つまり国民と国家は重なっている、でも完全に一緒ではない、つまり「重層的」関係にあると言えます。吉川勇一さんは、後楽園球場で昼間野球を楽しんだ人が、夜はプラカードをもって国会周辺でデモをすることはある、と指摘し、それを市民運動へのパートタイム的な参加、と表現しています。「市民」というのは24時間市民運動をしているわけではなく、家庭では父親・母親であり社会では職業人であり地域では消費者である。つまりモザイク的な中で「市民」をやっている。そういう多面的な人びとに対して意見広告運動がどう訴えていくのが問われています。

今回の衆議院選挙では、全体集合と部分集合の関係が崩れたと指摘する人がいました。もう原発はやめようという全体集合の中で経済を良くしようという部分集合があるという構造ではなくて、それが逆転してしまったのではないかと。次の意見広告運動では、平和とか命の安全がベースにあつてこそ豊かさがあるという全体集合と部分集合の関係を、どう紙面に定着させデザインしていくかが、大きなテーマだと思います。

新聞に掲載されることの信頼性や公開性は、デジタル化された空間のようなネットとはまた異なります。新聞購読者の9割が投票に出かけたとの調査もあります。新聞に掲載する意見広告の意義はまだ大きいと思います。

平林祐子さん — 3・11と市民運動

私は90年代半ばの新潟県巻町の反原発住民投票運動の研究調査以来、特に環境に関わる社会運動の研究に多く関わってきました。巻町の住民投票運動では、それをきっかけに原発建設計画が中止さ

れたわけですが、現地に通ってインタビュー調査などをしました。その後も、原発立地点の地元の住民運動、漁民の方とか、土地を取られた方だとかを訪ねたりしました。2000年代に入って以降は、

実は原発問題よりも明るい気分になれる(笑)自然エネルギー導入の方法などについて、ドイツの例などを勉強していました。

そこに3・11の福島原発事故が起きてしまいます。東京の都心近くに住んでいます。事故直後は本当に怖くて、最初の1週間は窓を閉めきり部屋に閉じこもっていました。ヘリコプターが水を撒いたのに原子炉建屋に全然入っていない映像を見た時は「もうだめだ」と思って夜逃げみたいにして逃げました(笑)。



平林祐子さん(都留文科大学教員)

そのあと3月末に、東京電力の前で若者たちが大勢集まって抗議している画像をインターネットで見えて「すごいな、これは行かない」と思って、恐る恐る東電前に見に行きました。さらに3・11のちょうど1ヵ月後の4月10日に高円寺でデモがあつて、私も手製

の巨大プラカードを持って行きました。そこに1万5千人の人が来たのです。主催者たちも警察も全く予想外の数だったようで、警備のお巡りさんが全然いない。だからすごく自由な感じで、明らかにいままでデモには全く無関係だったような人たちが来ていて高円寺を歩きました。その時に、これは本当に新しいことが起きていると感じました。そのあと6月と9月に、比較的伝統的な反原発グループのデモが芝公園で、若者中心の「原発やめろデモ」が新宿で、環境団体中心のデモが渋谷で各々ありましたので、学生を動員してデモ参加者のアンケート調査をやりました。それで新しい人が多いとか、いろいろなことがデータとして裏付けられました。それを学会で発表したあと、他の先生たちと一緒に書いた本がやっと今月出ます。その間に官邸前デモなどが盛り上がりがつて、今さら全然インパクトないよ(会場爆笑)、という感じなのですけど。

そこで私が書いたのは、アクセスするメディアが大きく変わってきているということです。そもそも学生も含めて若い人は新聞を読

みません。宅配の新聞は高いから絶対に取りませんし。上の世代から見ると若者はひとくくりに見えるかもしれませんが、すごくいろいろな人がいて、読む新聞・雑誌から聴いている音楽まで全部違います。

ですから、若者は新聞を読まな

細井明美さん ―不透明な選挙開票作業

もう半世紀近く前、高校3年生の私が初めてデモに参加したのが王子野戦病院反対闘争でした。そのときは、今のような平和的なデモではなく、男性の中にまじってジグザグに走り回る肉体的にもハードなデモでした。そのうち、政治運動の季節が去って私も活動の第一線から退いてしまいました。1995年の北京の国際女性会議から活動を再開し、9・11のアメリカ同時多発テロ事件を受けて成立したテロ特措法に対する違憲訴訟の原告になりました。イラク戦争後2ヵ月たった2003年6月にイラク入りしたホテルで、地域の学校や病院を回っていた高遠菜穂子さんとお会いして、持ち

いことを前提に、どのような読者に何を訴えるかを考えることが大切だと思えます。特に今の人は、戦争は嫌だけど憲法は変えてもいいじゃん、と思っていて、護憲と戦争反対が直結していません。護憲ではなく、「戦争反対!」の方が訴える力が強いと思います。

合わせた10万円のお金を使って現地女学校の再建をするなど、一緒に活動しました。



細井明美さん
(イラクホープネットワーク)

昨年秋に、北イラクにあるクルドのドメズキャンプに行ってきました。5万人のクルド難民がこのキャンプに暮らしていて、数百人の人達がシリア国境から徒歩で毎日逃げてきています。でも逃げてこられるのは主に体力のある若い

人たちです。ユニクロから譲り受けた中古の衣料50着を持って行ったのですが焼け石に水で、毎日子どもが産まれるからミルクが欲しい、と言われて、ああそうかと。

今日はふと疑問を持った、先の衆議院選挙の開票作業についてお話しします。インターネットに開票状況というページがあるのをご存じでしょうか。選挙区ごとの開票状況が時間を追って表示されるのです。千葉県とか神奈川県とか選挙区を調べていったのですが、なぜか東京都は開票状況ではなく開票結果のみ公表されています。

私は分析が好きなので、政党別得票数の推移を時間を追ってグラフ化してみたのですが、いずれの選挙区でも最終局面で集計数が急増するなど、発表された得票パターンが非常に似通っています。

何故なのだろうといういろいろ調べてみたら、全国の選挙の80%を請け負っているというムサシという民間会社があることを知りました。今回の衆議院選挙でも全国の地方自治体の大半が同社に選挙実務を委託しています。「選挙パック」というのがあって、選挙用の旗やたすきから、自動的に開くプ

ラスチック紙製投票用紙や開票箱、漢字や仮名の手書き文字を高速で処理する読み取り分類機、投票会場の設営からスタッフ派遣まで、すべてムサシが一括してやってくれるそうです。

ムサシという会社について総務省に問い合わせても、各自治体との契約なので詳細は把握してないという答えでした。そもそも最も中立公正に行なわれるべき開票作業を、一民間会社に丸投げして本当に大丈夫なのでしょうか。機械化すれば作業は効率化されるでしょうが、集計作業の本身はブラックボックス化してしまっています。東京都が開票状況を公開していないことも腑に落ちません。今後は、そういうことにも目を向けていかなければいけないと思っています。私も情報はネットから入手することが圧倒的に多いのですが、意見広告運動は、体の不自由な人などデモや集会に出られない方々でも意思表示ができる機会を作るものです。ぜひ続けて頂きたいと思っています。

(まとめ・野澤 信一／事務局)